

跡継ぎが生まれたら即・離縁！

なのにカタブツ騎士団長さまが甘すぎます！

目次

跡継ぎが生まれたら即・離縁！
なのにカタブツ騎士団長さまが甘すぎます！

5

番外編 刺繍のお守りと喧嘩

249

跡継ぎが生まれたら即・離縁！

なのにカタブツ騎士団長さまが甘すぎます！

第一章 妹の婚約話、上司の提案

ローゼが生まれたのは、シャハナー王国の末端貴族レーヴェン子爵家だった。生まれてから蝶よ花よと育てられ、たくさんの愛情をもらった。

愛情深い両親に、可愛い弟妹。貴族令嬢としての苦勞のない暮らし。

あの頃のローゼは幸せだった。自分がこのまま幸せになるものだと思わなかった。その暮らしが一変したのは、十三歳の時だ。

両親が落石事故に巻き込まれ、大ケガを負った。

幸いにも一命をとりとめたが、治療には莫大な費用がかかり、それでも前のように動くことはできなくなった。

同時に領地を襲ったのは旱魃^{かんばつ}による不作。領民の暮らしにも暗雲が立ち込め、悩んだ末に両親は自分たちの暮らしを切り詰め、お金を作った。それでも足りず借金もした。

そうして領民の生活はなんとか成り立つようになったが、子爵家の生活は貧しくなる一方だ。

思い通りに動けない両親、育ち盛りの幼い子供たち。のしかかった多額の借金。

屋敷の空気は昼夜問わず暗い。

そこでローゼは、自分がなんとかするしかない、と考えた。

当時十代だったローゼは悩んで、悩んで——結果、知り合いの伝手^{つて}で女騎士として訓練を受けることを選んだ。

父は猛反対し、母は泣いた。それでも、ローゼの意思は固かった。

自分がなんとかしないと、この家は没落していくだけだ。

最終的に両親はローゼの意思を理解してくれた。

訓練を終え、十五歳の時にローゼは正式に騎士として働きはじめることになった。

あれから八年。今ではローゼがレーヴェン家の稼ぎ頭だ。

子爵家の生活費、返済するべきお金。ローゼは身を粉^{こな}にして働いた。

気づけば事故から早十年。借金はあらかた返し終え、騎士団での立場も中堅となった。

レーヴェン家は完全に——とまでは言えないが、かつての生活を取り戻しつつある。

唯一問題があるとするなら二十三歳を迎えたローゼに、浮いた話の一つもないことだろうか。

両親はローゼが婚期を逃してしまっただと嘆くが、本人は気にしていない。女騎士としての仕事はやりがいがあるし、生意気盛りでも弟妹は可愛い。

家族が幸せであれば、自分はいき遅れと言われても構わない。

一生独身でもいいとすら、ローゼは確かに思っていたのだ。

——あの日まで。

その日、ローゼは久々に実家に帰っていた。両親から話があるという手紙が来たためだ。

シャハナー王国の王立騎士団には独身寮がある。独身の騎士はほぼ全員が入寮し、もちろん女騎士も例外ではない。ローゼも独身寮暮らしだ。

独身寮なので結婚したら出なければならぬ決まりだが、そもそも結婚が決まった女騎士は仕事を辞める者がほとんどだ。

現在所属している女騎士は皆独身で、既婚者はいない。その中で、ローゼは最年長だった。実家に戻ると、まず弟妹から近況報告を聞き、それから両親のもとへ向かったのだが――

「エリーが婚約!?」

両親が告げたのは、ローゼの三つ下の妹エリーに婚約話が持ち上がっているということだった。「まだ決まったわけではないわ。でも、前々からお付き合っていたのですって」

母がローゼを見つめる。ローゼは慌てて首を横に振った。

「わ、私も聞いていないわ! 今初めて知ったもの」

母は困ったような表情を浮かべる。ローゼなら聞いていたかも、と思っていたのだろう。

「……婚約ということは、その先は結婚でしょう?」

母が大きく溜め息をつく。

「お相手の方は、伯爵家の嫡男ちやくなんなのですって」

相手を聞いて、ローゼは母がエリーの婚約を心の底から喜ばない理由を悟った。

(伯爵家の嫡男ちやくなん——ということは、持参金の問題ね)

シャハナー王国の貴族同士の婚姻にはなくてはならないものがある。

それは花嫁側の家が用意する『持参金』である。

特に名門家系ともなると、多額の持参金を求めている。

伯爵家の嫡男ちやくなんとなると、かなりの額を求められたのだろう。

金額は相場こそあるが、最終的に決めるのは当主と夫人。当主夫妻の考え方次第では、相場よりも高いこともある。もちろん、逆もある。自身の家と血筋に自信があるほど金額を吊り上げるものだ。

「持参金のことでしょう?」

問いかけると、母は首を縦に振った。

「伯爵家ということは、相当な額を求めているでしょうね」

「ええ、そうなのよ。しかもご夫人は持参金を払えないなら息子との結婚は許さないとおっしゃっている」

頬に手を当てる母は、とても困っている様子だった。

(伯爵家のご夫人ともなると、古い考えの持ち主だろうし――持参金なしの結婚なんて想像もできないでしょうね)

古い考えを全否定するつもりはないが、古い考えに固執こしつするのも考えものだ。

「エリーには悪いけど、この婚約話はなかったことにしてもらいたいよ」

母のこの言葉にローゼは同意できなかった。

このままでは、エリーもローゼと同じように行き遅れてしまうかもしれない。

（たとえ生涯独身だって、私は女騎士として生きてきたことに誇りを持っているわ。でも――）

エリーはどうだろうか？

彼女は繊細で心優しい子だ。心ない言葉を真に受けて傷ついたら？

（そんなの許せるわけがないわ！）

ローゼが尊敬する師は、『悪口しか言わない他人など放っておけばいい』と言う。

師の言葉は正しい。だが誰もが同じように思うわけではない。

エリーがローゼと同じとは限らない。

「――母さん」

母の目を見た。

先ほどもずっと真剣なローゼの声を聞いた母の目が瞬く。

「私、エリーと話してみるわ。婚約の話を進めるのも断るのも、それからでも遅くはないでしょう」

「それはまあ、そうだけど」

ローゼを見つめる母の瞳からは、申し訳なさが伝わってくる。

（私は大丈夫だから）

帰るたびに、母は「負担をかけてごめんね」と謝る。

母はローゼに貴族令嬢としての幸せを掴んでほしかったと言っていた。令嬢として社交の場に出

て、素敵な男性と結婚して、子供を産んで――今のローゼには、考えられない生活だ。

「とにかく、エリーと話をするから」

「……任せたわ」

母も本心では、エリーに好きな人と結婚してほしいと思っているはず。ローゼだって、同じ気持ちだ。

屋敷の廊下を歩きながら、持参金の相場を思い出す。頭が痛くなりそうだ。

階段を上って、エリーの部屋へ向かう。階段の隅には埃が溜まっていた。掃除不足なのは一目瞭

然だ。

（人手不足なのよね。使用人も少ないし）

ローゼが働いて支えているとはいえ、子爵家はいまだに余裕がなく、使用人は最低限しか雇えない。裕福だった頃の面影が唯一残る屋敷は広く、手が回らないのは当然だった。

エリーの部屋の前に立ち、ローゼは扉を三回ノックした。しばらくして、「誰？」と声が返ってくる。

「ローゼよ」

名乗ると、室内から慌ただしい足音が聞こえ、勢いよく扉が開いた。

「姉さん！ 部屋まで来るなんて珍しいね」

「少し話しかかったの。都合が悪いなら後にするわ」

「まさか、大丈夫よ。……もしかして母さんからあのことを聞いたの？」

エリーは指先で自身の金髪をいじり、照れたように笑った。
うなずくと、エリーは一瞬だけ切なそうな表情になる。結婚が難しいことを、彼女も理解しているのだろう。

「入って。中でお話ししましょう」

大きく扉を開け、エリーはローゼに入室を促す。

室内は殺風景だった。物はあまりなく、家具も最低限。ところどころに修繕の跡が見える。彼女のワンピースもほつれており、かなり着古しているのがわかった。

（もう少し私に稼ぎがあったら——）

ドレスとまではいかなくても、エリーに新しい服くらいプレゼントすることができるのに。

「とにかく、座ってよ」

古びた木の椅子に腰掛けて、ローゼは彼女と向き合った。

「婚約のお話があるんですってね。お相手は伯爵家の嫡男だと聞いたわ」

単刀直入に問うと、エリーの頬が朱に染まった。真実らしい。

「そんな良縁、一体どこで掴んできたの？」

母から聞いてずっと気になっていたことを尋ねると、彼女は視線をそっと逸らした。

馴れ初めを語るのが恥ずかしいのか。

「あれは街へ買い物に出ていた時だったのだけど……」

エリーがうつむく。

「人にぶつかって倒れてしまって、そこに彼が駆けつけて、助けてくれたの。それがきっかけよ」
意外な話だった。伯爵家の嫡男との出会いというには随分と素朴だ。

「身分差があることは、はじめからわかっていたわ。それでも惹かれる気持ちが止まらなかったの」

声が、微かに震えている。恋をしていることが——それを彼女が申し訳ないと感じていることが、痛いほど伝わってくる。

「お相手はどちらの方なの？」

「シーレンベック伯爵家のエクムントさまよ」

シーレンベック伯爵家といえば長い歴史を持ち、伝統を重んじる家系だ。

（そうすると、やっぱり持参金は必要よね）

一口に伯爵家と言っても、いろいろなタイプがある。

持参金をそれほど重視しない家もあるので、わずかに期待したが——相手がシーレンベック家では、そうはいかないだろう。

「私、彼のしっかりしたところに惹かれたの。自分を持っているっていうのかしら？ 私にないものがある人だから、眩しく見えて」

エクムントについて語るエリーはまさに恋する乙女だった。

彼女の様子を見ると、ローゼの心に「なんとかしてあげたい」という気持ちが芽生える。

エリーには愛する人と結婚して、幸せになってほしい。

「けど、家の負担にはなりたくないの」

目を伏せたエリーは、自分の気持ちを押し殺しているに違いない。

本当はエクムントと結婚したいはず――

「無理だって、わかってるのよ。だから私、エクムントさまの求婚を断ろうと思うの」

――本当は彼と結婚したい。

溢れんばかりの強い気持ちをローゼは感じた。

（私は恋をしたことがないし、結婚願望だってなかった。だから、エリーの気持ちはわからない）
同僚だった女騎士たちの話によると、恋とはとても甘酸っぱくて、苦しいものらしい。
些細なことで嬉しくなるのに、小さなことでへこむ。ローゼには未知の感覚だ。

でも、今のエリーはこの気持ちを味わっているのだろう。

「ねえ、エリー」

ローゼはエリーの両肩を掴んだ。エリーが驚いたように目を見開く。

「本当は結婚したいんでしょ？」

真剣に尋ねると、エリーは控えめにうなずいた。

「――うん」

そして、か細い声を上げた。

その様子を見たローゼは、心を決めた。

「じゃあ、姉さんに任せて。姉さんがなんとしてでも持参金を用意するわ」

エリーの瞳を見て宣言すると、彼女の双眸に申し訳なさが宿った。

「だけど、姉さん」

「大丈夫。私は今までもこの家を支えてきた。なんともしてやるわ」

自身の胸を叩いて、ローゼはエリーに笑いかける。

少しして、エリーの目から涙がこぼれた。

「――ありがとう」

間を置いて紡がれた言葉は、涙交じりだった。

「こら、泣かないの。まったく、あなたって大きくなってもずっと泣き虫なんだから」

「だ、だってえ！」

溢れる涙を必死に拭うエリーの姿を見て、ローゼの決意が固くなる。

なんとしても、エリーと恋人を結婚させてやりたい――

（頑張らなくちゃ）

口にした言葉は取り消すことができない。

かといって、どうするべきだろうか。

エリーはずっと「ありがとう」と繰り返している。引き返すことはできない。

翌日。ローゼは騎士団の訓練場にて一人、模擬剣を振っていた。

訓練の際に使用される剣はケガをしないように模擬のものを使用する。実践訓練でも同じ。

無心に模擬剣を振りつつも、ローゼの頭の中は昨日のことではいっばいだった。

(エリーにはああ言ったけど、あてなんてないものね)

ローゼの給金だけでは、持参金を用意することはできない。

いや、何カ月分も貯めれば必要な額に届きはする。しかし、その間の生活が成り立たない。

エリーの下にも育ち盛りの弟妹が四人いる。食費を削るという選択肢はない。

「どうしよう……」

無意識のうちにぼやいていた。

その声が聞こえたのか、誰かの足音がローゼのそばで止まった。

「ローゼ、なにか悩み事か？」

男性の中でも低い声が耳に届いた。

声のほうに顔を向ける。そこには豪快なあごひげをたくわえた、逞しい高年齢の男性が立っている。

「師匠」

ローゼが男のことを呼ぶと、彼は豪快に笑う。

彼はアントン・ヒューン。今年六十歳を迎えた、この騎士団で剣の指南役を務める男だ。

今は第一線から退いているが、若手の頃は多数の武勇伝を残した国の英雄だ。特に四十年近く前に隣国が攻めてきた際、彼が敵の騎士たちに囲まれても諦めず戦い、ついに打ち勝ったという伝説を知らぬ者はいない。

現役の騎士や、騎士を目指す者にとって憧れの存在だ。

現在は後進の育成に力を入れており、十五年前からこの騎士団の訓練に携わるようになった。

ローゼにとっても彼は憧れの人物であり、尊敬すべき師匠である。

「いやあ、お前がそんな暗い表情をするなんて珍しいな。なんだ？ 体調でも悪いのか？」

言葉は乱暴だし、デリカシーもない。が、アントンの声には確かな心配が宿っている。

(師匠になら、話してもいいかも)

誰かに話せば、一人で抱え込むより幾分楽になるはずだ。

「実はその、急遽大金が必要になってしまつて」

こんなことを言うのは情けない。

でも、アントンはローゼがこの世でもっとも尊敬している人物であり、かつローゼの家庭の事情を知っている。

今さら恥ずかしがる必要はないし、アントン以上に相談に適切な人物はいない。

「そうなのか？」

「はい。妹に婚約話が持ち上がったのです。けど、お相手の家が持参金を用意しないと婚約は許さないと言っていて」

声をひそめつつ、事情を語る。

ローゼの話を最後まで聞き終えたアントンは、あごひげを撫でて「ふうむ」と呟いた。

「こんなこと、師匠に相談しても迷惑ですよね。すみません」

頭をぺこりと下げると、アントンは手を横に振った。

「いや、構わん。わしにはどうすることもできんが、人に話すだけでも少しは気が楽になるだろうよ」

アントンがローゼの肩を軽く叩いた。彼の態度はローゼの気を少し楽にしてくれた。

「しかし、おめでたいことだというのに、貴族というのは厄介なものだな」

「師匠も伯爵だったではありませんか」

「なあに、それも二十年も前の話だ。今は息子に爵位を譲った、ただの老いばれさ」

豪快に笑ったかと思うと、アントンがじつとローゼを見つめる。彼の瞳はなにもかも見透かすようだった。

「だが、これだけは言わなくちゃならん。ローゼ、お前が自分を犠牲にすることはない。そんなことは、妹さんも望んでいないはずだ」

先ほども色濃いい心配が声に宿っていた。

「たとえば身売りをしようとか。そういうことは考えないほうがいい」

確かにローゼの頭の片隅には、身売りという選択もあった。もしくは、年老いた貴族の後妻に収まること。

女騎士としての収入だけでは限界がある。娼婦にでもなったほうが——と考えたのは、実は一度や二度ではない。

「わしにはどうしてやることもできんがな。そうだ。イグナーツのやつに相談するのはいいかもしれん」

アントンがいい案を思いついたとばかりにぼんっと手を叩いた。

彼にとつてはいい案かもしれないが、ローゼにとつてはありえないことだ。

「団長には言えません」

考える必要などなかった。

イグナーツ・マッテス。シャハナー王国の名門貴族マッテス伯爵家の当主でありながら、現在は騎士団長の職にも就いているエリート中のエリート。

しかし、彼は二十八歳になっても浮いた噂の一つもない。

（団長は女嫌いなものよ。他の女騎士とも最低限の会話しかないし）

彼が話す女騎士は、古株のローゼくらいだ。が、それも事務的な会話のみ。身の上話どころか、世間話だつてしたことがない。

（そりゃあ、他の女騎士より話すけど）

時折、彼が女性と話している光景を見ることがある。そういう時、彼は「そうか」の一言ですべてを乗り切ろうとしていた。

結果、他の女騎士たちはまともに報告もできないと早々にさじを投げた。

そうして女騎士のみが当たった任務の報告は、すべてローゼが行うと暗黙の了解ができたほどだ。

「どうしてだ？」

「団長は女性がお嫌いです。私からの相談なんて」

「わしの目には、イグナーツのやつはローゼに心を開いているように見えるが」

それは絶対にない。

（師匠としては、団長と私が仲良くするのが理想だろうけど）

心を開いているように見えたなら、他の女性への態度が冷たすぎるせいだ。相対的に心を開いているように見えるだけ。

「そんなわけありません。それと、このことは内密にしていたけると嬉しいです」

ローゼは話を終えると訓練に戻った。

アントンがローゼのお願いに返事をしなかったことを、この時のローゼは気に留めなかった。

その後もローゼはいつも通り業務に当たった。

いつても、この日は訓練ばかり。通報もなく、平和な一日だった。

終業後、他の騎士たちと軽く話して、女子寮に戻る道を歩く。

騎士団の女子寮は一般的に見て豪奢と言える部類の建物だ。

それぞれに一室を与えられ、バスルームも個別に完備されている。冷暖房も備え付けで、寝台の心地もとてもいい。

生活空間としての水準が高く、快適な暮らしができる。それを目当てに庶民の女性が女騎士を目指すこともあるほどだ。もちろん貴族でも働きたいと思う女性、家の稼ぎの足しにしたいと仕事を探す女性もいる。

だが危険と隣り合わせの騎士という仕事を目指す女性は決して多くはない。

平和なシャハナー王国では戦に駆り出されることこそないが、国内で起きる揉め事や暴力沙汰の取り締まりや調査を広く請け負うのが騎士団の役割だ。その中でも女騎士は後方支援を担うことが多いとはいえ、女性、ましてや貴族令嬢がそんなことをするべきではない、と眉をひそめる者はまだにいる。

「今日は暑かったし、帰ってシャワーでも浴びよう」

大きく伸びをして、ローゼはのんびり歩いた。

現在、騎士団に所属している女騎士は合計十二名。男性の十分の一にも満たない。

シャハナー王国が国を挙げて女性の社会進出に乗り出したことがあり一時期より増えたが、やはりまだまだ人手が足りない。

女子寮に戻る途中、若い女騎士たちがベンチに腰掛けて楽しそうに話をしているのが見えた。

彼女たちは十六、七歳でローゼに比べると若い。

（師匠にはああ言われたけど、やっぱり……）

このところ騎士として働くことの限界を感じている。彼女たちのように、若い頃は伸びしろもたくさんあったのに――

（裏方に徹するか、別の仕事を見つけるか）

といっても、女性がこれ以上の稼ぎを見込めるのは娼婦くらいだろう。考えるだけで、気持ち沈む。

「あ、ローゼ！ここにいたのか！」

重く沈んだ気持ちのまま歩いてみると、後ろから名前を呼ばれた。

振り向くと、人のよさそうな笑みを浮かべた男がローゼを手招きしていた。

「ヴィム」

彼——ヴィム・アドルフはローゼにとつて、もつとも気の許せる同僚である。

以前は親友とも呼べる女騎士がいたのだが、彼女は結婚を機に仕事を辞めた。以来、連絡はほとんど取っていない。

「どうしたの？ 今日はずもう終業時間よ？」

ヴィムは時間にきっちりしている。始業時間より前に仕事はしないし、終業時間を過ぎるとすぐに帰る。業務時間外に仕事をするのが嫌いだと堂々と公言する男だ。

許されているのは、業務時間内はしっかり仕事をするため。

「ローゼに話があるんだ」

真剣な面持ちに、ローゼはぼかんとした。

「改まってどうしたの？」

まさか、彼も騎士を辞めるなどと言うのだろうか——と想像し、顔がこわばった。

ローゼを見たヴィムが「違う違う！」と大きく否定する。

「イグナーツがお前を呼んでる」

「——え？」

ローゼの金色の目が瞬いた。

ヴィムはローゼの肩を抱き寄せる。その触れ方には恋愛感情などない。あくまで同僚同士の戯れだ。

「なんでも、ローゼに言いたいことがあるんだってさ」

低い声で囁いた。

（まさか、師匠が話したの？）

だが、イグナーツにローゼを助ける義理などない。それに『言いたいこと』という表現が引っかかる。

イグナーツとローゼは同じ騎士団に所属している上司と部下だ。それ以上でも以下でもない。

「心当たりはないのか？」

ローゼの様子を見たヴィムが続ける。

心当たりなどあるわけがない。

「もしかしたら告白かもな！」

わざとらしいヴィムの言葉に、ローゼは慌てて彼の口を手でふさいだ。

（告白なんてありえないでしょ！）

強くヴィムをにらみつけると、彼は「だつてさあ」と懲りた様子もなく口を開く。

「お前に対するイグナーツの態度、ちよつと柔らかいじゃん？ っていうより、もはや全身から愛おしさが溢れてるっていうかさ」

「バカなこと言わないでよ！」

あれのどこが愛おしい女性に向ける態度なのか。

ローゼには理解不能だ。

「じゃあ、俺は伝えたからな！ すっばかすなよ、また明日！」

「あ、ちよっと！」

用件は伝えた、ヴィムは足早に男子寮へ向かった。

今からはプライベートということだろう。付き合いが長いため、彼の考えは手に取るようになる。

「団長が私を呼び出す？」

言葉にしてみると、余計に疑問が深まった。

仕事の話——もしくは女子寮の管理に関する話なら、ローゼを呼び出すのは当然だ。

けど、ヴィムの口ぶりからして違うだろう。仕事に関してはきっちりした彼のことだ。そういった事務的な話であれば、きちんと内容まで伝えるはず。

『言いたいこと』というのに心当たりはないが——アントンがローゼの悩みを話してしまったとして、なにか苦言でも呈されるのだろうか。

（今の時間、団長は執務室にいることが多かったわね）

この時間のイグナーツは一人執務室にこもっていることが多い。執務室に向かえば確実に会えるだろう。

彼一人ということは、二人きりになるということ——

（いいえ、そんなことを気にしていても仕方ないわ。そもそも、あの団長だし！ ヴィムの言葉だつて、彼の勝手な想像じゃない）

不意に、ヴィムが口にした言葉が脳裏をよぎり、首を横に振って自分に言い聞かせた。

そうだ。今までだってイグナーツと二人きりの場面は多々あった。そんな時も彼はいつだってローゼを真っ直ぐ見ることにすらなく、一人仕事に励みつつ報告を受けていた。

「……さつささとして、終わらせよう」

ローゼは気合を入れるために自身の頬を軽く叩いた。踵を返して、騎士団の本部へ足を向ける。道を引き返していると、アントンの言葉が蘇った。

（やっぱり、師匠が話したの？ 一応口止めはしたけど）

そういえば、アントンが口止めを了承した覚えがない。

（いいえ、師匠を信じましょう！ 弟子たるもの、師匠を信じなくてどうするの！）

だが数分後、その信頼は呆気なく崩れ去るのであった。

「団長、ローゼです」

騎士団長の執務室に辿りつき、扉を三回ノックした。間を置いて「入れ」と返ってくる。

聞き慣れた低い声は落ち着いており、普段から感情を乱すことのない彼らしいものだ。

ローゼは扉を開けて、室内に足を踏み入れた。

執務室の中はシンプルだった。執務机と椅子、応接用のテーブルとソファ。右側の壁は一面本

棚となっており、様々なものが保管されている。一番多いのは書類だ。

部屋の一番奥にある執務スペースに、イグナーツはいた。

執務机の上には書類が広がっている。

騎士団長といっても、剣の実力だけで選ばれるのではない。人望や事務処理能力、統率力なども含めて総合的に判断され、前任の団長が指名、国の中枢が承認することで決まる。

「——来てくれたか」

ローゼの姿を見て、イグナーツがわずかに安堵の表情を見せた。

彼は珍しく真っ直ぐにローゼを見つめている。なんとなく、胸が騒いだ。

「とにかく、そこに座ってくれ」

イグナーツが応接用のソファアーに視線を向ける。

（私は長居するつもりなんてないのに……）

もしかしたら長くなる話なのかもしれない。

ローゼは指示通りにソファアーに腰を下ろす。イグナーツが対面のソファアーに腰掛けた。

（団長って、改めて見るとすごく美形よね）

イグナーツの顔をじつと見つめた。

彼の黒髪は乱雑に切っているように見えて、しっかりセットされている。鋭く吊り上がった青の双眸には迫力があり、大人でも恐ろしさを感じる。顔立ちの精悍^{せいけん}さも合わさって、迫力のある美形だった。

長い間共に仕事をしているが、彼の迫力には今でもたまに身震いする。

「ローゼ嬢」

彼に見惚れていたが、イグナーツに改まって名前を呼ばれ、背筋を正した。

先ほどまでのんびり構えていたが、今は上司の前だ。しっかりしてはならない。

「団長、本日はどのようなご用件で——」

微かに震えた声で問いかけると、彼が立ち上がる。

先ほど座ったばかりなのに、慌た^わだしい——そう思っていると、彼は長い脚を動かし、素早くローゼのそばにやってきた。

そして、すぐ隣に腰かける。

「——え？」

肩と肩が触れそうなほど近い距離。驚いてローゼが瞬きを繰り返す。

「今日はローゼ嬢に提案が——いや、頼みがあって個人的に呼び出した」

イグナーツがローゼを見つめる。

（ど、どうしたのかしら？）

いつもなら、真っ直ぐ見ることなんてないのに——

（とても不思議）

彼の瞳に映る自分の顔も、動揺して見える。

鼓動が高まっていく。

「頼み……ですか」

心臓の音をごまかすようにイグナーツの言葉を繰り返す。彼は力強くうなずいた。彼の青の瞳がローゼを映している。

柄にもなく顔が熱くなった。

「俺と結婚しないか」

「へ？」

真剣な面持ちで彼が紡いだ言葉は、まったく予想しなかった言葉だった。

間抜けな声を上げ、ローゼは瞬きを繰り返す。ぽかんと彼を見つめると、彼の目尻が下がった。

「今日の休憩時間のことだ。師匠にローゼ嬢の事情を聞いた。金が必要なんだろう？」

やはりアントンはイグナーツに話してしまったのか。

内密にしてほしいと頼んだのに――

「俺と結婚してほしい、と言ったんだ」

「どうして、そうなるのですか？」

彼の思考がわからない。

ローゼに大金が必要なのと、イグナーツがローゼに求婚するのはまったく関係のないことである。

「その、だな」

イグナーツがローゼから視線を逸らす。

これはいつも通りの彼の態度だ。

「正式な結婚というよりは、契約結婚というべきだろうか」

――契約結婚。

「なにか目的があつて、私を一時的に娶^{めと}りたいということでしょうか？」

『契約結婚』という言葉から一番に思いついた可能性を口にすると、彼はうなずいた。

「こんなことを言うのは情けないことなのだが」

「はい」

「父が、そろそろ妻を迎えて跡継ぎを作れとうるさくてな……」

彼の言葉の先が、ある程度予想できた。

「だから父を納得させるために、ローゼ嬢には俺の妻役を演じてほしいんだ」

やはり、予想通りだった。

「だが、跡継ぎも産んでほしい。跡継ぎさえできれば、父は納得してくれるだろう」

イグナーツの全身から申し訳なさが滲み出ている。

（契約結婚というから、お飾りの妻かと思っただけ――）

どうやら形だけではなく、実際に子供を産むことまで求めているらしい。

「もちろん、嫌なら無理強いはいしない。だが、もしも引き受けてくれるのなら、妹さんの持参金は

俺がすべて用意する」

その提案に、ローゼは目を見開いた。

彼が提示したメリットこそ、今もつとも欲しているものだったからだ。

「他に欲しいものがあるのなら、用意する。だから、俺と契約結婚をしてほしい」

甘さもなにもない求婚だ。あるのはただ利害関係だけの、いたって無味乾燥なもの。

夢見る乙女が相手なら、やり直しを要求されそうである。

(でも、私はこれでいい)

エリーが好きな人と結婚できる。なら、自分はどうなっても構わない。

(それに、団長だったら少なくとも信頼のおける人だとわかっているもの。変な貴族の後妻や、不特定多数の男性に抱かれる娼婦になるよりずっと安心だわ)

膝の上に置いた手に力を込めた。

イグナーツはローゼを見つめ返事を待っている。

「俺と結婚して子供を産んでくれ。跡継ぎが生まれたら、その時点で離縁に応じる」

やはり、これはかなりいい契約なのではないだろうか？

そう思うのに、心の中に小さな葛藤が生まれる。

これで、本当にいいのだろうか——と。

(いいに決まっているじゃない。団長と結婚して、子供を産んで。子供が生まれたら、私はまた自由)

もちろん妻である期間は、妻としての仕事をこなす必要がある。が、貴族夫人としての仕事は騎士の仕事より危険もない。

ローゼはイグナーツの目を見つめ返した。彼は変わらず真剣な眼差しでローゼを見つめている。

彼の瞳には偽りも悪意も、からかいの感情もこもっていない。

(なにを考えているかなんて、さっぱりだけど)

彼は表情が乏しくて、口数も少ない。必要以上に他者と関わろうとしない人だ。

騎士団長としての実力も、その実直さも見てきたつもりだ。

それでもローゼは彼自身のことをなにとして知らない。知ろうとしなかった。

(今日は少し、団長のことがわかった気がする)

思い上がりだろうか。

「跡継ぎが生まれたら、本当に離縁してくださいね？」

最終確認として尋ねた。イグナーツは一度だけ息を吞んで、うなずいた。

「その場合は、ローゼ嬢から離縁を申し出てくれ。俺は応じる」

ちよつと引かかる言い方だ。まるでローゼから言わないと、離縁するつもりはないと言っているようで——

(団長にも思うことがあるのかしら?)

軽く首を横に振って、ローゼはイグナーツと視線を合わせた。

「私、女騎士としての仕事にやりがいを感じているのです」

限界が見えてきたと悩みはしても、この仕事は好きだ。

「同性のほうが話しやすいことは、あります。男性から加害を受けた女性とは、女騎士のほうが頼りやすい。剣を振るうだけではなく、相手の心に寄り添うことも、女騎士の役目です」

「ああ」

「もちろん、犯罪自体ないことが理想です。でも、被害に遭う方がいる限り、その心を少しでも救いたいのです」

はじめはお金のためだった。

ローゼの意識が変わったのは、女騎士として従事しはじめてからだ。周りに感謝されるうちに、ローゼはこの仕事に誇りを持つようになった。

「だから、私は団長と離縁したら、なんらかの形でもう一度人の役に立ちたいと思うのです」

「離縁後のことは、ローゼ嬢に任せる。俺にできることがあるなら手助けは惜しまない」

力強い言葉だった。

「俺からはローゼ嬢に契約上の妻になってもいい、跡継ぎを産んでもらう以外は求めない。——どうだろうか？」

思い返せば家族以外の男性とこんなに真っ直ぐに見つめ合ったのは——初めてかもしれない。

「団長」

背筋をびんと伸ばす。

「私、団長の妻となつて、跡継ぎを産みます。どうか——よろしくお願いいたします」

頭を深々と下げて、ローゼは彼の提案を受け入れる意思を伝えた。

顔を上げ、イグナーツを見つめる。彼の頬が微かにゆるんだ。

いつも強面な彼の穏やかな表情は、珍しい。

「——よかった」

それはただ、ローゼが条件を呑んだことに対する安堵にすぎないはずだ。

だが耳に届いた声はあまりに柔らかく、ローゼは一瞬耳を疑った。

(どうしてそんなに、嬉しそうにしているの……?)

彼がローゼの手を取る。男らしいごつごつした大きな手が触れてきて、頬が熱くなる。

イグナーツがローゼの手の甲に、唇を押しつけた。

「——っ！」

これではまるで、忠誠のキスじゃないか。

「あ、あのっ！」

——そこまでしなくてもいいのに！

慌てるローゼに、イグナーツは首をかしげた。

「嫌だっただろうか？」

「いえ、そういうわけでは！」

イグナーツの不安そうな瞳を前にすると、ローゼは本心を言えなかった。

ごまかすように彼から視線を逸らす。

イグナーツがローゼの手を両手で包んだ。

「絶対に大切にする。絶対にだ」

戸惑うローゼはこくこくと首を縦に振ることしかできない。

（団長は女性嫌いだし、女性の扱いに慣れていないのよね！ だから、こうなるんだわ！）
もしここにいるのがローゼではなくても、彼は同じ行動をとっただろう。
意思を強く持たなくては。

このままでは——ローゼ自身が彼に求められているのではないかと、勘違いしそうだった。

第二章 永遠の愛（仮）誓います

あれからあつという間に三カ月が経ち。

突然決まった二人の結婚に周囲は驚いたものの、互いの親族から反対する声は上がらなかった。
ローゼはイグナツの両親の反応が不安だったが、拍子抜けするほどあっさり認めてもらった。
もともとイグナツの父は彼に結婚を急かしていた。相手となるローゼは社交界に出ていないこと
もあり、評判は良くも悪くもない。反対する理由はなかったのだろう。

結婚に向けた準備は忙しかった。嫁ぐための準備だけならまだしも、騎士を引退すること
で引き継ぎ業務にも追われたのだ。女子寮の管理人の役目、その他に担当していた仕事など、すべ
ての引き継ぎを終えた時、安堵から熱を出してしまった。

そうして忙しなく準備を乗り越えた今日。ローゼは王国一の大聖堂にて、イグナツと永遠の愛
を誓うこととなった。

（私、変じゃないわよね？ 人前に出ても大丈夫よね？）

姿見の前に立って、自分自身を見つめる。

ローゼが身にまとうのは純白のウェディングドレス。シンプルなデザインだが、レースがふんだ
んに使われた美しいものだ。ローゼの体型にぴったりのこのドレスは、世界に一つしかない特注品

らしい。

イヤリングやネックレスなどのアクセサリーもすべて特注品だと聞いている。シルバーの台座に大ぶりのトップスがあしらわれた、可愛らしくも上品なものばかりだ。

どれも単品でとても素敵な品だが、すべてが合わさると一種の芸術品のようだった。それが、今日の主役であるローゼを彩っている。

上品さの中にも可愛らしさがあり、姿を見つめるローゼの胸に感動が芽生えた。

（こんな可愛らしい姿を、私が……？）

本当は、フリルやレースをたっぷり使った可愛い衣服が好きだった。

でも、顔立ちや高い背丈を理由に諦めていた。

自分だって本当は、可愛い格好がしたかった――

（こんなに素敵なものを用意してくださるなんて）

芽生えた感動はどんどん膨らんだ。

（髪の毛も綺麗にしてもらって、夢を見ているみたい）

髪を結ったのはマッテス伯爵家の侍女たちだった。ドレスを着せてくれたのも彼女たちだ。

侍女たちは親切で、ローゼの緊張をほぐすために様々な話をしてくれた。

彼女たちの話の中でもっとも印象に残ったのは、ドレスやアクセサリーの制作にはすべてイグナーツが関わっているということだった。

「旦那さまったら、デザイナーにこれでもかと要望を加えて、困らせていましたよ」

一人の侍女が髪の毛を編み込みつつ、教えてくれた。

具体的にどういう注文だったのかと聞くと、彼女は「ふうむ」と悩んだ。

「奥さまの美しさを活かしつつも、可愛らしさも欲しいとおっしゃって」

「可愛らしさ？」

「はい。奥さまはとっても可愛らしいお方だから――と」

彼女が当然のように紡いだ言葉に、ローゼは納得できなかった。

「私はそんな、可愛げのある顔立ちではないわ」

首を横に振ると、侍女たちが顔を見合わせた。

「まあ。ですが旦那さまから聞いたお話では――」

一番若い侍女が口を開いた時、他の侍女が慌てて彼女の口を手でふさいだ。

「どうしたの？」

「い、いえ。大したことでは」

「ええ、そうです。きつと一生に一度の結婚式だからと、はりきったのです！」

「それくらい大切なですよ！」

どうやら彼女たちはイグナーツがローゼをととても大切にしているのだと勘違いしているようだ。

訂正しようかと思ったが、今はしない方がいいと判断した。

イグナーツが依頼したという仕立屋は、たくさんの貴族を顧客に持つ人気の店だ。予約をとっても最低十カ月は待つという。

この結婚は突然決まったものなので、本当は間に合わないはずなのだ。つまり、相当金を積んで順番を早めてもらったのだろう。貴族を顧客に持つ店の場合、金払いのいい客を優先するのはよくある話だ。

一体いくらかったのか——ローゼは怖くて聞けない。一生聞かないでおこうと心に刻んだ。「姉さんったら、いつまで姿見の前にいるの？」

控え室のソファーに腰掛けるエリーの声でローゼは現実に戻った。

彼女の言葉はもつともだ。ローゼはドレスを着てから五分おきに姿見の前に立っている。

「ドレスで人前に出るのが不安なのよ」

両親が事故に遭ってから、ドレスなんて着ていない。ワンピースすら着る機会はぐんと減った。

「ヒールの高い靴で転ばないかとか、裾を踏まないかとか。それ以前に、似合っているかもわからないし……」

不安を上げるときりがない。

「それに、まだ結婚するという実感がないの。突然すぎて、頭もついていかないし」

首を横に振って、目を閉じた。

イグナーツは一刻も早くローゼを妻に迎えたいと言い、かなり無茶なスケジュールを組んだ。

ローゼも慌ただしかったが、イグナーツの忙しさはローゼの比ではなかっただろう。彼は寝る間も惜しんで仕事や準備をしていたとアントンから聞いている。

（父さんや母さんのほうが盛り上がっていたし）

思い出すのはイグナーツがローゼと結婚したいと、レーヴェン子爵邸を訪れた時のこと。

彼は真剣な面持ちでローゼの両親に挨拶をし、手土産まで持参した。

『ぜひ、ローゼ嬢を妻にもraitaku』

明らかに緊張した様子の彼は、深々と頭を下げた。

彼は伯爵家の当主なので、頭を下げる必要などないというのに——

結果、両親はイグナーツを大層気に入り、ぜひ妻にもらってほしいと言い出した。

妹たちは馴れ初めを聞きたいとせがみ、弟は義兄ができると喜んだ。

「それにしても、まさか姉さんが結婚するなんて思いもしなかったわ」

「その言い方はないでしょう」

エリーの言葉にムツとする。対するエリーは涼しい顔だ。

「そうじゃないの。姉さんが自分を犠牲にしているのは、見ていて辛かったから。だから、姉さんが素敵な人と結婚するのが嬉しくて」

感極まった様子のエリーに、微妙な感情を抱く。

ローゼは口を開こうとして、やめた。ここで真実を伝えるなんてできない。

「幸せになってね、姉さん」

「——うん」

やはり、真実は黙っておこう。

（幸せかはわからないけど、団長のことから私を手酷く扱いはしないわ）

彼に対する恋愛感情はなくても、上司としての信頼はある。今はそれで十分だ。

ローゼたちが式を挙げるのは、シャハナー王国一の大聖堂だ。ここで結婚式を挙げるのは、名門貴族や王族ばかり。名目上はすべての民に開かれているとされているが、かかる費用は下位貴族や庶民の手が届く額ではない。

そのせいか、この大聖堂で式を挙げると幸せになれる——なんてジンクスまである。

ここで結婚式を挙げることは女性たちの憧れなのだ。

（私の場合、団長の顔を立てるためではないけれど）

ローゼにも嬉しい気持ちはある。けれど、顔に出すことはできなかった。

この大聖堂で式を挙げるのは、名門伯爵家の面子を守るため。

極上のウェディングドレスだって、高価なアクセサリーだって。イグナーツが恥をかかないためのものではない。

（団長はあの日以来、妙な態度だけど）

結婚が決まってから、イグナーツはなにかとローゼに構うようになった。

さりげなくエスコートする。困っていると颯爽と現れ、助けてくれる。

周囲はイグナーツの変化に驚愕していたが、アントンだけは楽しそうに笑っていた。というより、あれはもはや大爆笑だった。

（期待してしまいそうになる。だけど、ダメよ）

ローゼはあくまで、子を産むための契約妻だ。

期待したら、後が辛いに決まっている。

彼の優しさに甘え続けるわけにはいかない。

自分に言い聞かせていると、控え室の扉がノックされた。

「新郎さまがご対面なさりたいそうです」

（団長が？）

新郎新婦はバージンロードで対面するのが常だ。

だが、もしかしたら急用かもしれない。ローゼは素早く判断し、イグナーツと会うことにした。

「じゃあ、姉さん。私は広間で待ってるから」

「うん、また後で」

エリーが控え室を出ていった。入れ替わるようにイグナーツがローゼの控え室に入ってくる。

「——ローゼ」

伏せていた顔を上げると、イグナーツがローゼの目の前に立っていた。彼の姿にローゼは息を呑む。

（——すごい）

騎士が自身の式で着るのは、王室行事の際に身にまとう正装にいくつかの装飾を加えた程度だ。彼の正装は何度かローゼも見ることがある。初めて見るわけではないのに、なぜか胸が高鳴っている。

控えめな金色の飾り。胸元に輝く騎士団のエンブレム。控えめな装飾はシンプルゆえに彼の魅力を損なうことなく引き立てている。

あまりの美しさに、いつそ恐ろしさすら感じてしまうほどだ。

（この人と、私が結婚——？）

——本当に自分がこの人の隣に立っていいのだろうか？

ほうっと見つめていると、イグナーツがローゼに近づく。彼は流れるような動きで手袋を片方外した。

「ローゼ」

彼の手がローゼの頬に触れる。ほんのりと温かく、こそばゆい感覚だった。

「あ、あの」

彼はそれ以上なにもしなかった。言葉を発することなく、じっとローゼを見つめている。

戸惑うローゼをよそに、彼の目尻が下がった。優しい表情だ。

「綺麗だな」

ローゼの顔が熱くなる。

（私よりも団長のほうがずっと綺麗ですけど……）

言葉にはしなかった。

イグナーツの指がローゼの唇に触れる。指はローゼの唇をなぞっていく。

「紅が移ってしまいます」

注意したが、イグナーツはやめなかった。ローゼの顔に自身の顔をぐっと近づける。

至近距離で見る彼の顔は心臓に悪い。心臓の音がいつもよりずっと大きく聞こえてくる。

「口づけさせてくれ」

彼の真剣な言葉にローゼは困惑した。

真意がわからず、ローゼは彼を見つめる。彼は真剣な表情のままだ。

「式での口づけを初めてにはしたくない。だから今、ローゼと口づけがしたい。ダメだろうか？」

イグナーツの瞳は、縋っているように見えた。心を鷲掴みにされるような感覚。

（そんな言い方するなんて、ズルい）

ローゼはお人好しだ。縋るように言われると、断ることはできない。

（それに、団長もこんな表情をするのね……）

無下にしたくない気持ちが生える。

熱が引かない頬を押さえて、ローゼは彼から視線を逸らす。

（不思議と、嫌ではないわ）

だったら、一度くらい口づけてもいいのではないだろうか？

たとえ二人の間に恋愛感情がなくても、一時的とはいえ夫婦になるのだ。

子作りだつてするのだから、ある程度の触れ合いは必要だろう。

「ど、どうぞー！」

緊張のせいで、声が上がった。

（がつついてるみたいに聞こえなかった？）

ローゼはそんなつもりでなくても、彼がどう受け取るか――

イグナーツを見つめると、彼はほっとしたような表情を浮かべていた。

「すまない」

唇を撫でていた指が、移動した。

頬を軽く撫で、手のひらがローゼの頬に優しく触れる。

まるで慈しむかのような触れ方に、ローゼの鼓動がさらに速くなった。

動揺を隠すように、目を瞑る。

しばらくして、唇に彼の唇が重なったのがわかった。

（これが、キス）

触れるだけのキスなのに、心が満たされるようで不思議な感覚だ。

（これで、おわり）

ローゼが瞼を上げようとした時――また唇が重なった。

一回、二回。何度も繰り返し唇が重なって、ちゅっと音がした。さらに、彼はローゼの唇を食む^は。

（な、長くない――!?）

キスといっても、一度触れるだけだと思っていたのに。

（紅が落ちてしまうから、やめてもらわなくちゃ――）

抗議しようと唇を開くと、ぬるりとしたものが口内に入ってくる。

「んんっ!?」

驚いて舌で押し返す。が、逆に絡め取られてしまう。

柔らかくて温かいソレの正体に気づいたのは数秒後のことだ。

（これって、団長の舌……!?）

イグナーツの舌がローゼの口内を刺激する。彼の舌先が頬の内側をつつき、歯列をなぞった。

たったそれだけなのに、ローゼの身体はじんと熱を持つような感覚に襲われた。お腹の奥が、

熱くなっていく。

「ふあっ、あっ」

息を漏らして、イグナーツの口づけから逃れようとする。

このまま食べられてしまうのではないか――という恐怖が芽生え、心を支配する。

（いや……ダメ、怖い）

女騎士として凶悪な犯罪者に立ち向かった時より、ずっと怖い。

自分が自分ではなくなるような感覚に、ローゼの身体がぶるりと震えた。

脚が震えて、身体から力が抜けていく。今にも崩れ落ちそうになり、咄嗟にイグナーツの衣服に

縋った。

「だめ――や、め」

逃すまいとするように、彼の逞しい腕^{たくま}がローゼの背中に回った。

ローゼが足腰立たなくなりそうになっても、イグナーツはまだ解放しようとしめない。

口元から水音が響く。脳内が甘くしびれて、なにも考えられなくなっていく。
（ダメ、キスで殺される——！）

本能が命の危険を感じた。

逃れようと必死に身をよじる。脚を震わせながらも、必死に彼の分厚い胸を叩いた。
間を置いて、彼の顔が離れていく。

「ふあ、う」

全身が酸素を求めている。必死に肩を揺らしつつ呼吸を整える。

上目遣いでイグナーツをにらみつけると、彼は自身の口元を大きな手のひらで覆っていた。

「——可愛い」

彼がこぼした言葉が耳に入り、ローゼは瞬きを繰り返す。

（今、可愛いって？ 聞き間違いじゃなくて？）

今のローゼの顔は可愛いなんてものじゃないだろう。

聞き返そうかと思ったが、勇気が出なかった。

「だ、団長。その」

見ると、彼の唇に紅が移っていた。

指摘しようとしたローゼを咎めるように、イグナーツがローゼの手首を掴んだ。

「団長と呼ぶな」

彼の表情は真剣そのものだった。

「俺は、その。お前の上司である以上に、これからは……だな」

イグナーツが口ごもる。

見上げた彼の頬は微かに赤く、照れているようだ。

ローゼの目には、彼の態度が可愛く映る。

「イグナーツさま」

呟くように彼の名前を呼んだ。イグナーツが目を見開く。

そして、すぐに口元をゆるめた。美しい彼の笑みからは、優しさが伝わってくる。

今まで見たことがない表情を目の当たりにして、また頬が熱くなる。

「今後はそう呼んでくれ」

「はい。では名前で呼ぶように心がけます」

夫婦なのだから、名前で呼ぶのは当然のこと。

自分自身に言い聞かせて、ローゼは近くにあったタオルを手にとった。そしてイグナーツの唇に

押しつける。

「——っ！」

驚いたように彼が身を引いた。

その動きが可愛らしくて、ローゼは穏やかな気持ちになりつつ彼の唇をタオルで拭いた。

「私の紅が移ってしまったので。ご迷惑でしたか？」

式の前にキスをしていたなんて、バレたくない。

仲睦まじいと思われるのは悪くないだろうが、絶対に恥ずかしい。

彼の唇を拭くと、イグナーツはローゼの手からタオルを受け取った。

「悪かった。わざわざ拭かせてしまって」

「いえ、構いませんよ」

普段はきつちりしているイグナーツのちょっと抜けたところ。見つけると案外可愛いものだ。

もちろん、言葉にはしない。男性に対して「可愛い」と伝えても、褒め言葉として受け取ってもらえるわけではない。

（でも、思うくらいはいいわよね）

口に出さず、一人で思うくらいは許してほしい。

微笑ましい気持ちになっていると、イグナーツがローゼの身体を引き寄せた。

抵抗することもできず、イグナーツの胸に顔から突っ込んでしまう。

「……え？」

彼の腕がローゼの背中に回った。

逃がさないとばかりにぎゅうぎゅうと抱きしめられ、ローゼは混乱する。

（どうして、私は抱きしめられているの？）

冷静さを取り戻すことができず、ぼうつと立つことしかできない。

「ローゼ。絶対に大切にすることから」

イグナーツの声は真剣だ。冗談でも嘘でもない。ひしひしと本気が伝わる。

（私たちは契約結婚。そんな大切にするような関係？）

疑問が浮かんだが、わざわざ尋ねるほどのことではない。それに彼の真意を知らなくても夫婦関係は成り立つはず。

（イグナーツさまは真面目なもの）

少しの間でもローゼを妻として迎える以上、大切にするのは義務だという彼なりの誠意なのだろう。

それ以外の可能性は思いつかない。

ローゼは自分に釘を刺す。勘違いしないために。

「あの……ふつつかな妻ですが、どうぞよろしくお願いいたします」

なにか言わなくてはならない気がして、当たり障りのない挨拶をする。

「俺のほうこそ、至らない夫になると思う。だが、ローゼを幸せにできるよう精一杯努力する」

真面目な彼らしい返答だ。

ローゼの身体を堪能するかのように、イグナーツが抱きしめる力を強くする。

「……そうです！ お、お伝えしておきたいことがあります」

伝えるべきか、伝えないでおくべきか。ローゼにはずっと悩んでいたことがあった。

（私たちは一時的にでも夫婦になるのだから、隠し事はしたくない）

ローゼの両親は仲睦まじい。自分たちが両親のようになることはないだろうが、イグナーツには誠実に向き合いたいと思う。

「私、男性との交際経験がないのです。ですので、男性の考えや気持ちなどがわかりません」結婚前の貴族女性でも、隠れて男性と交際する者はいる。一線を越えないなら問題ないとされているためだ。

「きつと、不快にさせてしまうこともあるでしょう」素直に白状した。

気まずくて彼の目を見ることができない。うつむいていると、彼が「ふう」と息を吐いたのがわかった。

「そうか。つまり、俺が初めての男ということか」

「えつと、そういうことになりますかね」

先ほどのキスだつて初めての経験だ。もちろん、子作りするものも。

「嬉しい。俺がローゼの初めての男になることができるなんて」

「イグナーツさま、今日なんだかおかしくないですか？」

彼の態度に違和感を覚えた。

（もしかして、もうお酒を飲んだの？ それとも式の空気にのまれた、とか？）

様々な考えが頭をよぎるが、ローゼは振り払った。

顔を上げて、イグナーツとしつかり見つめ合う。彼は温かい目でローゼを見つめていた。

「これからは、なんでも俺に相談してほしい」

「はい。夫婦ですものね」

困ったような笑みを浮かべたローゼに、イグナーツがなんとも言えない表情を浮かべた。

ローゼには彼の心がわからなかった。どうしてこんな表情をするのかも――

（情が移らないようにしなくちゃ）

なんとか無事に離縁の日を迎えたい。

彼に恋心や愛情なんて抱くわけにはいかないのだ。

結婚式と披露宴は滞りなく進んだ。

大聖堂で婚姻証明書にサインをし、誓いのキス。マッテス伯爵邸に移動すると、互いの親しい人物や騎士団の面々、身内を招いた披露宴に移る。

弟妹はドレス姿のローゼを「可愛い」と褒めてくれた。

今までそんな風に褒められた経験がないため、ローゼはずっと照れくさかった。顔を背け、赤く染まった頬をごまかすことに必死だった。

そして招待客たちに酒が回りはじめた頃。ローゼは一足先に私室に引込み、初夜の支度に移った。

ナイトドレスに袖を通し、ローゼは夫婦の寝室でイグナーツを待った。

（……こんなに恥ずかしいものだったのね）

ローゼは頬を押さえた。

子作りが条件の契約結婚なので、身体を重ねる必要がある。今まで性的なことに疎^{うと}かったローゼは、自分なりに子作りや男女の営み、閨事^{ねいじ}について調べた。本来ならもっと早くに知っておくべきことだったが、いろいろなことが重なり後回しになっていたのだ。

(怖くもあるし、戸惑いもある)

大きく音を鳴らす心臓。胸を押さえて、呼吸を整えた。

寝室の中は薄暗く、小さなランプが灯っているだけだ。心を落ち着かせるためなのか香木が焚かれている。安らぐ香りだったが、今のローゼの緊張をほぐすには及ばない。

寝台に腰掛け、一体どれだけの時間が経ったのだろうか。一時間にも二時間にも感じるほど長い時間を一人で過ごした。

さすがに眠気が出てきた時、寝室の扉が勢いよく開いた。

驚いて顔を上げると、扉の近くにイグナーツがいる。彼はラフな格好に着替えていた。

「すまない、ローゼ」

心底申し訳なさそうな表情を浮かべる彼に、ローゼは微笑んだ。

騎士団長を任されるということは、かなり人望があるということ。特にイグナーツは上からも可愛がられていたので、引退した騎士たちに囲まれていたのだろう。

彼の人望に感心しつつ、ローゼは立ち上がってサイドテーブルの上にある水差しを手を取った。

そして、グラスに注いでイグナーツに差し出す。

彼はグラスを受け取ると、水を一気に喉に流し込んだ。その際に動く喉が、ローゼにはやけに艶

めかしく見えた。

「ローゼ？」

イグナーツが怪訝^{けげん}そうな表情をしていた。

ごまかすように笑みを浮かべると、彼の表情が不安そうなものに変わる。

「――怖いのか？」

確かに怖くはある。

初めては痛いというし、彼に裸体をさらすことも恥ずかしい。

見るに堪えない身体をしているわけではないが――

(むしろ、筋肉がつきすぎて嫌がられないかしら。一般的な貴族令嬢みたいに柔らかくないわ)

ローゼは騎士として鍛えていたため、普通の女性より筋肉質だ。屋敷で大人しく過ごす貴族令嬢には筋肉などついていない。

頭の中をよぎったわずかな不安。打ち消すように首を横に振って、ローゼはイグナーツを見上げた。

彼の真剣なまなざしがローゼを射貫く。ローゼも覚悟を決めなくてはならない。

イグナーツが空になったグラスをサイドテーブルに戻し、寝台に腰を下ろした。

ローゼも寝台に戻ると、彼が身体を寄せてくる。肩と肩が触れ合って、心臓が大きく音を鳴らした。

「できる限り、優しくするつもりだ」

彼の言葉にローゼはうなずいた。

「ただ——我慢できなかったら、すまない。もしも俺が暴走したら殴ってくれ。蹴ってくれても構わない」

彼がガバツと勢いよく頭を下げる。

一体どういう意味なのだろうか——

ローゼがきよんとしていると、イグナーツの手が肩に触れた。大きな手がローゼの肩を優しく押す。

「——あっ」

寝台にあつさりと押し倒される。イグナーツはローゼに覆いかぶさるように寝台に乗り上げた。

彼の瞳の奥に宿る情欲に気がついて、息を吞む。

「本当に嫌だったら殴ってくれ」

イグナーツが繰り返し、ローゼの唇を指でなぞった。

「んっ」

その動きは壊れ物に触れるように優しい。こそばゆくて、身をよじる。

「ローゼ」

名前を呼んだ彼が唇を重ねる。

しっとりした優しい口づけにローゼの心臓が跳ねた。

（誓いのキスとも、あの時のキスとも違う）

ずっと、慈しみが伝わるような口づけ。

大切にしたいという彼の気持ちが伝わって、頭がくらくらした。

「イグナーツさま」

唇が離れ、思わず彼の名前を呼ぶ。

「ローゼ、可愛い」

うっとりした声音だった。

ローゼが驚いていると、また唇を奪われる。

今度は触れるだけの口づけを数回、舌先で唇を叩かれる。

ローゼがうつすら唇を開くと、予想通りイグナーツの舌がローゼの口内に入ってきた。

「あ、んっ」

やはり怖いと、ローゼは身をよじった。

しかし、イグナーツは逃がさないと言うようにローゼの頭を掴む。抵抗する術がなく、キスを受け入れることしかできない。

「んっ、んう、うあんっ」

イグナーツの舌がローゼの口腔内を探る。

歯列をなぞられ、口蓋もなぞられる。舌の付け根をいじられると、身体が跳ねてしまう。

（気持ちいい）

ローゼの身体から徐々に力が抜けていく。リラックスして彼に身を委ねた。手は彼の衣服を掴む。